氏　名（本 籍）	前 田　和 範（高知県）
学 位 の 種 類	博　　士（スポーツ科学）
学 位 記 番 号	甲　第　３７　号
学 位 授 与 日	令和３（２０２１）年３月１７日
学位授与の要件	大阪体育大学大学院学位規程第４条第１項該当
研　究　科　名	スポーツ科学研究科（博士後期課程）スポーツ科学専攻
論　文　題　目	地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する態度：コミュニティ感覚理論を援用した実証研究
審　査　委　員	主　査　　教　授　冨 山　浩 三
	副　査　　教　授　土 屋　裕 睦
	教　授　藤 本　淳 也

論文内容の要旨

近年のプロスポーツチームのマネジメントにおいては、地域のステークホルダーとの関係構築を重視しながら地域密着型の戦略を採用するチームが増加している。本研究の目的は、コミュニティ感覚の観点から地域密着型プロスポーツチーム所属選手のホームタウンに対する態度がどのような要因と関わり合って形成されるかを明らかにすることである。

研究 1 では、野球独立リーグに所属する選手のデータを用いて、ホームタウンに対する責任感を元にしたコミュニティ感覚（SOC-R）の先行要因、および結果要因について共分散構造分析を用いて分析を行った。その結果、「チーム活動に対する調和性パッション」「チーム活動に対する強迫性パッション」「チームの誇り」の 3 因子がホームタウンに対する責任感の先行要因として正の影響を与え、ホームタウンに対する責任感が地域におけるロールモデル、そしてコミュニティとの関係構築努力に正の影響を与えることが明らかになった。また、これらの関係に対する在籍期間の違いによる影響について多母集団同時分析を用いて分析を行った結果、在籍期間が 1 年未満の選手は強迫性パッションが、在籍期間が 1 年

以上の選手は、チームに対する調和性パッションとチームへの誇りが有意に正の影響を与えることが明らかになった。

次に研究２では、研究 1 の結果に時系列的な視点を付加することで、スポーツマネジメント領域における SOC-R 研究の精緻化を行った。具体的には研究１で構築した SOC-R モデルの循環性を検証するための縦断的研究を行った。その結果、シーズン序盤から終盤にかけて「関係構築努力」と「強迫性パッション」が有意に低下し、ホームタウン活動への参加数が多い選手ほどロールモデルになろうという意識が高いことが明らかになった。

これら二つの研究結果から、プロスポーツチームに所属する選手のホームタウンに対する態度は、チーム活動への個人的信念に影響を受けたホームタウンに対する責任感として形成され、ホームタウンにおいてロールモデルであるべきという意識や、ファンや住民との関係構築努力に影響を与えるものである事が明らかになった。一連の研究によって、Nowell and Boyd(2010)が示した SOC-R モデルについてデータを用いて実証するとともに、モデルの循環性を実証することができた。

審査結果の要旨

（論文審査）

博士論文発表会終了後、副査の教員２名を交えての口頭試問を行った。口頭試問では、「地域密着型プロスポーツチーム」の地域密着型の意味について、具体的にはどのようなチームを指しているのか、またモデルの循環性の内容について、そして組織所属の重層性の意味するところなどについて質問があった。加えて、当該研究の最終到達点について、実際に選手のホームタウン活動によって成果が示される事を証明する必要が無いのかについても質問があった。これらの問に対して、前田氏はすべて的確に回答したことで、前田氏の有する当該分野および周辺領域においての高い専門知識を確認することができた。

抽象的な概念モデルとして示された SOC-R モデルをスポーツマネジメント領域に応用したことは当該研究が高い独創性を有していると評価でき、概念モデルをデータで実証したことは、スポーツと地域コミュニティの関係に関する研究領域においては大きな成果といえること。また近年では多くのプロスポーツチームがホームタウン活動を充実させているが、活動の主役である選手のマネジメントに対しての有用性が高い研究であると判断した。

（最終試験）

執筆された博士論文は、目的・課題の明確性、方法の妥当性、研究の信頼性と論旨の一貫性、研究結果の意義、研究の独創性、論文の体裁において十分基準を満たしていると判断した。また研究発表および口頭試問において前述の内容に加え、研究遂行のために必要な態度、資質も十分基準を満たしていると判断した。以上の結果から前田和範氏は博士の学位を授与するのにふさわしいと判断し、合格と判定した。